

夜の太陽

作
萩原宏紀

登場人物

真理

妊婦。最初は6カ月くらいのお腹だが、どんどん膨らんでいく。父親が誰かは不明。いずれ得体のしれないなにかを生むが、大切に育てる。

能力【**受胎 Conception**】新世界の神を孕む

幸子

団地妻。シャンプーの詰め替えをしない夫の古田に激怒し、風呂場で殺害。

能力【**透明 Invisible**】息を止めている間だけ透明人間になる

小森

ニート。引きこもり。ゲームヲタク。探偵さんに密かな恋心を抱いているが言いだせない。古田とは肉関係にある。

能力【**召喚 Summons**】異世界の住人を召喚する

古田

幸子の夫。シャンプーの詰め替えが面倒で、ずっと石鹸で頭を洗っていたが、そのことに妻が激怒し、殺される。小森とは毎月、最後の週の水曜日に1回6000円でセックスをする。

能力【**不死 Undead**】死んでも動ける

探偵さん

スーツ姿の探偵（バイト）。303号室の住人を張り込んでいる。しかし、303号室の住人がまったく帰ってこないの、相手が誰かはわからない。そもそも、なぜ張り込みが必要なのかも知らない。張り込みといえはアンパンと牛乳。

能力【**探偵 Detective**】アンパンと牛乳を一緒に食べると死者と会話ができる

老婆

浮浪者。ゴミを漁っている。世界を支配できるだけの能力を手に入れたが、近所の野良猫のためにしか使わない。

能力【**錬金 Alchemy**】物質を別の物質に変換する

マジカルなっちゃん／ミラクルなっちゃん

小森に召喚された異世界の魔法少女。大きいお友達に大人気のアニメ「魔法少女マジクル☆なっちゃん」の主人公である。マジカルなっちゃんは赤、ミラクルなっちゃんは青を基調とした衣裳を着ている。顔はほぼ同じであるが、双子などの設定はないので、作画の問題が大きい。ちなみにタイトルとなっている「マジクル」は「マジで狂っている」の略。

能力：【**魔法 Magic**】魔法を駆使して悪の組織と闘うことができる

場所

とある市営団地に併設された、猫の額ほどの公園。ブランコ、砂場、ベンチ。

長い時間をかけて、ゆっくりと朽ちている。

永らく回収がきていないのだから、大量の家庭ゴミが放置されている。

1 過去

老朽化も甚だしい市営団地の前に併設された小さな公園。遊具は古く錆ついており、ここで遊ぶ子ども姿は見受けられない。

上手にはベンチ、下手には片方の鎖が外れているブランコ。ブランコの前には、今では猫のトイレになっている砂場。

舞台の奥には家庭ゴミが山積みになっており、永らくゴミの回収がきていないことを示している。

下手から買い物袋をもった真理が現れる。大きなお腹から、妊婦であろうことがわかる。ゆつくりと上手まで歩いてきたところで、ベンチに座る。しばらくぼんやりと空を眺めているが、その表情は硬い。

下手から同じように買い物袋をもった幸子が現れる。真理よりは明らかに荷物が多い。ベンチに座っている真理を見つけて、笑顔で話しかける。

幸子 こんにちは。

真理 幸子さん。お買い物ですか？

幸子 ええ。真理さんも？

真理 はい。(と、買い物袋を見せる)

幸子 一緒だったのかしら？ 気付かなかった。

真理 私は散歩がてら、川向うまで歩いて行ったので。

幸子 大丈夫なの？(と、真理の隣に座る)

真理 (お腹をさすりながら) 適度に運動したほうがいいって、お医者さんにも言われていますし。とはいえ、さすがに疲れちゃって。

幸子 でしょうか？ あまり無理しないで。どうせ買い物なんて毎日行くんだから、なにかあったら私に言って。

真理 でも、幸子さんのところだって、荷物多いのに。

幸子 (自分の荷物を見て) うちは旦那が無駄に大食いだから。

真理 私は自分の分だけなので。(と、自分の荷物を見る)

幸子 いいのよ、気にしないで。旦那に車ださせてもいいし。どうせ、休みの日はうちで寝てるだけで、ほんと家のことなにもしないんだから。

真理 どこもそうなんじゃないですか？

幸子 そうかもしれないけど。シャンプーの詰め替えすらしないのよ。

真理 あれ、地味にイラつとしますよね。

幸子 今どれくらい？

真理 6カ月と少し。

幸子 男の子？ 女の子？

真理 まだわからないんですよ。

幸子 そうなの？

真理 普通だったら、もうわかるみたいなんですけど。

幸子 だって、ついていたら男の子、ついてなかったら女の子でしょ？

真理 そうなんですけど。

幸子 まあ、生まれてからのお楽しみね。

真理 動けるうちに、いろいろと用意しておきたかったですけど。

幸子 そっか。そうよね。さすがに服とかは好みもあるだろうし、

代わりに買ってくるわけにはいかないものね。

真理 どうせ、すぐに大きくなるから、最初はなんでもいいんです

けどね。

幸子 (空を見上げて) そうね。すぐに、あんな風に。

真理 (同じく空を見上げて) さすがにあそこまでは……

沈黙。

下手から小森が現れる。手には携帯ゲーム機。

真理と幸子を見つけて、立ち止まる。

幸子 都会ではまだ大騒ぎみたいよ。

真理 そうなんですか？

幸子 東京に住んでる友達に聞いた。いまだに逃げるだのなんのつて。

真理 逃げるって、どこに。

幸子 ほんとに。今じゃテレビでもほとんどニュースにならないから、すっかり落ち着いたんだなって思ってた。

真理 もう7月だっていうのに、全然暖かくなりませんね。

幸子 あれの影響で地球の、なんていうの？ こう、なんかがズレたとかなんとか。

真理 自転。

幸子 そう、それぞれ。

真理 少し前までは、テレビもそればっかりだったのに、今は普通ですもんね。

幸子 まあ、私たちが騒いでもね。えらい人がなんとかしてくれるでしょ。

真理 えらい人？

幸子 えらい学者の先生とか、研究者とか、大学の先生とか、カリスマ塾講師とか。

真理 塾講師がなんとかできますか。

幸子 知らないけど。さてと、そろそろ夕飯の支度しないと。

真理 私は、もう少し。

幸子 大丈夫？ あまり冷やしたら良くないんじゃない？

真理 少しだけ。

幸子 そう。(と、立ち上がって) なにかあったら、ほんと、遠慮なく言ってね。急に産まれる！ とかなって、車が必要なときとか。

真理 大丈夫ですよ。今は妊婦専用のタクシーとかもあるし。

幸子 そうなんだ。

真理 いちおう、いろいろ調べたりしてるんですよ。

幸子 でも、せっかく同じ団地に住んでるんだから。困ったときはお互い様。

真理 ありがとうございます。

幸子 じゃあね。お大事に。(と、上手に去る)

真理は座ったまま幸子を見送る。

顔を戻すと、下手にいる小森に気づく。

真理 こんにちは。

小森 ……。

真理 どうしたの？

小森 なにも。

真理 あ、お菓子食べる？

真理は買い物袋からポテトチップスを取り出す。

小森 いらない。

真理 ポテチきらい？

小森 私はコンソメ派だから。

真理 じゃあ、こつち。

真理は買い物袋から別のポテトチップスを取り出す。

小森 両方あるんだ。

真理 私はうす塩派なんだけどね。つい買っちゃうの。

小森 うす塩派なの？

真理 昔、コンソメ派と一緒に住んでた時期があつて。

小森 (真理のお腹を指さして) お父さん？

真理 それとは別。ほら。(と、ポテトチップスを差し出す)

小森 開けて。

真理 え？

小森 手が汚れるから。

真理 ああ、はい。(と、袋を開ける)

小森は真理の隣に座って口を開ける。

真理 え？

小森は黙って口を開けている。

真理 ああ、はい。

真理は小森にポテトチップスを食べさせる。

小森はそれを租借しながら、携帯ゲーム機をやり始める。

次の会話の間、小森が口を開けると、真理がポテトチップスを食べさせる。

小森 ポテチってさ。

真理 うん。

小森 ポテチとコーラってさ、最強なわけ。

真理 さいきょう？

小森 ゲームとかネットするとき。

真理 そうなの？

小森 そうなの。

真理 なら、ちようど良かった。

小森 でもさ、ポテチって油ギトギトじゃん。

真理 そうね。

小森 その油がさ、ゲーム機につくのが超嫌いなわけ。

真理 うん。

小森 他の人はどうしてさるんだらうって思うわけ。

真理 手を拭きながら食べるんじゃない？

小森 でもさ、ポテチの油って、ティッシュとかで拭いたくらいだ

と、簡単にとれないでしょ？

真理 まあね。

小森 うまくいかないよね。

真理 そうね。

小森 ポテチとゲームはこんなに相性がいいのにさ。

真理 油が邪魔をするのね。

小森 悲しいよね。

真理 悲しいね。

小森 あ、やばい。

真理 え？

小森がベンチの裏に隠れる。

下手から魔法少女マジカルなっちゃんが現れる。

赤を基調とした衣装を着ており、手には魔法のステッキ。

なにかを探しているようで、血走った目で辺りを見回している。

マジカル あの野郎、どこ行きやがった！

真理はその奇抜な格好と、その格好にそぐわない鬼気迫る雰囲気

気に、ポテトチップスを持ったまま啞然として言葉がでない。

マジカルなっちゃんは、あらゆる罵詈雑言を吐きながら、ステ

ッキでゴミの山を蹴散らし、なにかを探している。

しばらくして、マジカルなっちゃんが真理に気づく。

マジカル あんた、見なかった？

真理 はい？

マジカル だから、見なかったかって。

真理 なにを？

マジカル あの女。

真理 誰？

マジカル 知らねえーよ。

真理 知らないの？

マジカル いきなり呼びだしておいて、名前も名乗らずにとっか行っちゃまったんだからよ。

真理 それは大変。

マジカル 大変だよ。どうすんだよ。どうやって戻るんだよ。

真理 おうち遠いの？

マジカル は？

真理 いや、だから、おうち。

マジカル マジで言ってるの？

真理 なにが？

マジカル あんた、この格好見て、なんとも思わないの？

真理 (頭おかしいな、と思いつつ) かわいい格好だなんて。

マジカル 世界を照らす魔法の光！マジカルなっちゃん！(決めポーズ)

真理 ……。

マジカル 世界を導く奇跡の力！ミラクルなっちゃん！(決めポーズ)

真理 ……。

マジカル 魔法と奇跡の超絶コラボレーション！光と力の壮絶シン

フォニー！2人合わせて、マジクルなっちゃん！

真理 ……。

マジカル ……。

真理 ……。

マジカル ……。

真理 ……。

マジカル ……。

真理 ……。

マジカル ……。

真理 ……。

マジカル ……。

真理 ……。

マジカル (大きなため息) もういいわ。(と、下手に去る)

真理 (マジカルが行ったのを確認して) もう行っちゃよ。

小森がベンチの裏からでてくる。

真理 今の人が探してたのって。

小森 たぶん、私。

真理 今のなに？

小森 マジカルなっちゃん。

真理 うん。そう言ってたね。

小森 魔法少女マジクルなっちゃんの主人公。

真理 コスプレってやつ？

小森 ううん。

真理 違うの？

小森 ほんもの。ほんもののマジカルなっちゃん。たぶん。

真理 どういうこと？

小森 わからない。わからないけど、たぶん私のせい。

真理 いきなり呼びだされたって言ってたけど。

小森 たぶん、それが私の力。

真理 たぶんばかりね。

小森 真理さんは？

真理 わたし？

小森 真理さんの力は？

真理 さあ？ 私にはそんな力、ないんじゃないかしら。

小森 本当に？

真理 みんながみんな違ってわけじゃないでしょ？

小森 真理さんにはあると思う。

真理 どんな力？

小森 それは私にはわからないけど。

真理 ないわよ、そんな力。

小森 そうかな。
真理 あるはずがない……そんな力……

真理はお腹をさする。
暗闇。

2 現在

舞台の奥で老婆がゴミを漁っている。

上手のベンチにはきちんとスーツを着た、探偵さんが座っている。手にはアンパンと牛乳。

探偵さんは腕時計に目をやる。

探偵さん よし。12時。

牛乳パックにストローをさし、アンパンの袋をあける。

アンパンを一口かじる。

老婆の手から大量のキャットフードがこぼれ落ちる。

老婆はそれをゆつくりと拾い上げ、手に持ったビニール袋に入れる。

探偵さんはそれを気にする素振りもなく、牛乳を一口飲む。

下手から幸子が現れる。

幸子は探偵さんを発見すると、大きく息を吸い、そのまま息を止める。

そして息を止めたまま探偵さんに近づく。

探偵さんは幸子の存在に気付かず、アンパンを食べている。

そのうち、息を止めているのが苦しくなった幸子は大きく息を吐く。

その瞬間、探偵さんは目の前の幸子に気付く。

探偵さん (驚いて) うわっ。

幸子 あら、ごめんなさい。

探偵さん びっくりした。

幸子 驚かせるつもりはなかったの。

探偵さん 驚かせる気満々でしょう。いきなり目の前に現れて。え？

どうやったんですか？

幸子 人がものを食べてる姿って、つい見ちゃうのよね。

探偵さん やめてくださいよ。恥ずかしい。

幸子 恥ずかしくなんかありませんよ。

探偵さん それより、今のどうやったんですか？

幸子 そんなことより、うちの旦那を見なかった？

探偵さん 古田さんですか？ 見てませんけど。

幸子 どこほつき歩いてるのかしら。

探偵さん 団地からでてきたところは見てませんけど。

幸子 今日朝からずっとここに？

探偵さん ええ、まあ。仕事ですから。

幸子 毎日。

探偵さん 毎日。9時5時で。今は昼休みですけど。

幸子 それで旦那は見なかった？

探偵さん 見てないです。

幸子 そう。

探偵さん なにかあったんですか？

幸子 今、お昼休みなのよね。

探偵さん ええ。

幸子 ちょっと部屋まで来れる？

探偵さん どうして。

幸子 もう、女に言わせる気？

探偵さん やめてくださいよ。気持ち悪い。

幸子 おい。

探偵さん で、なんですか？

幸子 虫とか平気？

探偵さん 虫によりますよ。

幸子 ほら、最近、ゴミの回収がこないでしょ？

幸子は奥のゴミ山を見る。

老婆は再びゴミを漁っている。

探偵さん それどころじゃないんでしょね。

幸子 あれのせいで、よくでるのよ。

探偵さん ゴキブリですか？

幸子 やめて！ 名前を聞くのもいや。

探偵さん それでご主人を探していたと。

幸子ほんと、役に立たない。家にいてもなにもしないでくせに、肝心なときにはいないんだから。

探偵さん ゴキブリの名前の由来って知ってます。

幸子 知らない。

探偵さん ゴキブリのゴキって、数字の五に季節の季って書くんです。つまり春夏秋冬の四季のプラス1。ゴキブリって昔は貴重なタンパク源で、春夏秋冬にもうひとつ春の五季を待たないと食べられないってくらい高級食材だったんですよ。それで、五季ぶりに食べられるってことで、ゴキブリ。

幸子 だから、名前を聞くのもいやなんだって。

探偵さん ごめんなさい。

幸子 お詫びに退治してくださいさる？

探偵さん 善処します。

幸子と探偵さんは下手に去る。

入れ替わりで上手から古田が現れる。

ベンチに置き去りになったアンパンと牛乳を手にとる。

アンパンを一口かじり、牛乳を飲む。

古田 ふん……

アンパンと牛乳をベンチに戻し、老婆に近づく。

古田 なあ、ばあさん。

老婆 ……。

古田 いつもなに探してんの？

老婆 ……。

古田 そんなゴミの山、なにもないでしょ？

老婆 ……。

古田は思い切り、ゴミの山を蹴りあげる。

老婆は古田を睨みつけ、手に持っていたゴミを古田の前に掲げる。

古田 なに？

老婆 ……。

しかし、老婆はなにもせず、再びゴミを漁り始める。

古田 まあ、いいよ。別に喋りたくないならさ。あんたさ、さっきまでそこにいた男のこと知ってる？ なんか、探偵らしいけど、探偵ってなに？ いつも1人でブツブツ喋ってさ、気持ち悪いよね。あれ？ 今のオレも同じ状況？ 1人でブツブツ喋ってる感じ？ これは違うよね。うん。いちおう会話だよな？ まあ、ばあさん。

老婆 ……。

古田 あれ？ 生きてる？

老婆 生きてるよ。

古田 お、ようやく喋った。

老婆 あんたとは違う。

古田 どういう意味？

老婆 さあね。

老婆の手から、大量のキャットフードがこぼれ落ちる。
老婆はそれを拾い上げ、ビニール袋にいれる。

古田 キャットフード？それがあんたの力ってやつ？

老婆 そうだよ。

古田 そんなみじめな力もあるんだな。

老婆 私には充分だよ。

古田 そうかい。なら良かった。良かったのか？

老婆 過ぎた力は身を減ぼす。

古田 だけど、それがなんの役に立つ？

老婆 猫が腹を減らさずに済む。

古田 やけにこの辺りはいつまでも猫が多いと思ったら、あんたのせいかな。

老婆 悪いかい？

古田 いいや、別に。猫くらい、救ってやれや。

古田は下手へと去る。

老婆はゴミ漁りに戻る。

下手から探偵さんが戻ってくる。

探偵さん ふう、やれやれ。

ベンチに戻り、アンパンと牛乳を手取る。

探偵さん あれ？

アンパンがかじられていることに気付き、老婆をチラッと見る。

探偵さん ま、いいか。

探偵さんはベンチに座り、アンパンをかじって牛乳を飲む。
下手から小森が現れる。

まっすぐにベンチまで進む。

探偵さん あ、どうぞ。

探偵さんはベンチの端っこに寄る。

小森はベンチに座って、携帯ゲーム機をやり始める。

探偵さん 小森さん？だよな。

小森 は？

探偵さん 203号室の。

小森 はあ。

探偵さん あ、ごめんね、急に。

小森 別に。

沈黙。

探偵さん 小森さんってさ、

小森 (少しイラついて) なに？

探偵さん あ、ごめん、邪魔して。

小森 別に。

沈黙。

小森 なに？

探偵さん え？

小森 さっきの、言いかけた。

探偵さん たいしたことじゃないんだけど、いや、僕にとってはた
いしたことなんだけど。

小森 だから、なに？

探偵さん 小森さん、203号室でしょ？上の階の人、つまりは

303号室の人なんだけど、どんな人か知ってる？

小森 知らない。

探偵さん そっか。

小森 それだけ？

探偵さん うん、まあ、それだけ。

小森 303号室の人を見張ってるんでしょ。

探偵さん 見張ってるってわけじゃないけど。ってか、それってわ
りと秘密の話なんだけど。何気にこの団地の人、みんな知ってる
よね。

小森 知らないのは303号室の人くらいじゃない？

探偵さん マジで？

小森 こんな団地の公園なんて、普通は住んでる人しか来ないのに、

部外者が朝から晩までずっといるんだから、気になるでしょ。

探偵さん まあ、バレても別に問題はないんだけどね。

小森 なんて見張ってるの？

探偵さん さすがにそれは言えないよ。

小森 あっそ。

探偵さん (小森のゲーム機を指して) それ、いつもやってるよね。

小森 悪い？

探偵さん いや、そうじゃなくて。オレさあ、ずっと抱えている悩
みがあつて。

小森 なに、急に。

探偵さん いや、オレはね、ゲームとかネットするときって、ポテ

トチップスと牛乳が最強だと思ってるわけ。

小森 牛乳？

探偵さん そう。ポテトチップスと牛乳。

小森 コーラじゃなくて？

探偵さん コーラ……いや、確かにコーラも捨てがたい……いや、

しかし……

小森 それで？

探偵さん あ、いや、でもさ、ポテトチップスって油ギトギトじゃ
ん。

小森 うん。

探偵さん その油がさ、ゲーム機とかパソコンにつくのが、ものす
ごく嫌いなのね。

小森 他の人はどうしてるんだらうって。

探偵さん そうなんだよ。ポテトチップスの油つてさ、ティッシュ
とかで拭いたくらいじゃ、簡単にとれないでしょ？

小森 うん。

探偵さん うまくいかないなあ、と思つて。

小森 悲しいよね。

探偵さん 悲しい？ 悲しいか……うん、悲しい。あ、ごめんね、ま
た邪魔して。

小森 別に……邪魔とかじゃないし。

探偵さん 303号室の人、全然帰ってこないよね。

小森 私も見たことない。

探偵さん だからさ、わからないんだよね。

小森 なにが？

探偵さん なんて張り込みしてるのか。

小森 え？

探偵さん ずっと待ってるんだけど。

小森 なんて見張ってるか知らないの？

探偵さん 知らない。

小森 じゃあ、なにしてるの？

探偵さん だから、張り込み。9時から5時まで。

小森 5時以降に帰ってきてるかもしれないじゃない。

探偵さん そうなの？

小森 知らないけど。

探偵さん でも、オレの仕事は5時までだからな。

小森 よくわかんないけど。そっちのほうが悪いよ。

探偵さん そうかもね。

小森 そうだよ。

探偵さん さては小森さんって、優しい人だな。

小森 (驚いて) やさ……なにそれ？

探偵さん ちゃんと悲しみを知っている。

小森 だからなにそれ。

探偵さん 大切なことだよ。

沈黙。

小森 ……なんでいつもアンパンと牛乳なの？

探偵さん これ？ そりゃあ、張り込みといえ、アンパンと牛乳で

しよう。

小森 それだけ？

探偵さん まあ、それだけじゃないんだけど。ほとんど意味なんか

ないよ。

小森 じゃあ、今度はポテトチップスも持ってきて。

探偵さん どうして？

小森 私はゲームをするから。

探偵さん うん。

小森 あなたがポテトチップスを食べさせて。

探偵さん オレが？

小森 そしたら、油で手が汚れないでしょ？

探偵さん なるほど。

小森 そしたら、悲しくない。

探偵さん そりゃあ、名案だ。

探偵さんはアンパンの最期の一口を食べる。

小森 (立ちあがり) それじゃあ、約束ね。

探偵さん うん。わかった。

小森は上手に去る。

いつの間にか、老婆の姿もない。

探偵さん (手を合わせて) ごちそうさまでした。

下手から古田が現れる。

古田 探偵さん、なにやってるの？

探偵さん 古田さん。こんにちわ。

古田 今、誰かと話してました？

探偵さん いや、別に。

古田 そうですか。そうだ。そういや、わたしもひとつ、探偵さん

にお願いしようかな。

探偵さん なんです？

古田 いや、なに、よくある浮気調査みたいなもんですよ。

探偵さん 奥さんですか？

古田 あいつのことなんか、今さらどうこう詮索しませんよ。

探偵さん じゃあ、誰の？

古田 探偵さん、口はかたい？

探偵さん そりゃあ、まあ、こういう仕事ですから。

古田 いや、ほんと、ここだけの話なんですけどね。

探偵さん はい。

古田 いやいや、やっぱりまずいな。うん。これはまずい。

探偵さん そうですか。

古田 え？

探偵さん はい？

古田 いや、気にならないの？

探偵さん なにがです？

古田 わたしの話。

探偵さん 仕事の話なら聞きますよ。

古田 ああ、そう。

探偵さん まあ、でも今はお昼休みですし、仕事の話はあとでもいいですか？

古田 探偵さんはセックスしてる？

探偵さん それは仕事の話ですか？

古田 セックスの話。

探偵さん 最近はしてませんね。

古田 わたしはね、この歳ですけど、こんな身なりですけど、やってますよ、セックス。

探偵さん そりゃあ、ご結婚されてるんですし。

古田 いや、そうじゃなくて。妻とはセックスなんかしませんよ。

探偵さん そうなんですか？ 幸子さん、お綺麗なのに。

古田 あれ？ 探偵さんはああいふ女が好きですか。

探偵さん 好みというあれではないですけど、世間一般的に。

古田 まあね、わたしもなにを考えていたのか、あんな歳の離れた女をもらってね、最初はよかったですけど。あれ？ 探偵さん、結婚は？

探偵さん 残念ながら未体験で。

古田 じゃあ、これは人生の先輩からの忠告だと思って聞いてもらいたいんだけどね。

探偵さん 恐縮です。

古田 結婚するなら若い女より、姉さん女房。これ絶対。そりゃあ、遊ぶなら若い女の方が良いけどね。結婚は別。ある程度ね、人生の機微というか、酸いも甘いも知ってなくちゃ、夫婦生活なんて送れやしませんよ。

探偵さん そういふもんですか。

古田 そういふもん。あれ？ なんの話してたっけ？

探偵さん 古田さんがセックスしてるって話ですかね。

古田 そうそう、それ。そのセックスがね……いやいや、やっぱり忘れてください。やっぱりこれはまずい。

探偵さん そうですか。じゃあ、依頼があるときは、事務所までお越しください。

古田 事務所？

探偵さん ええ。まあ、わたしの事務所ではないですけど。

古田 そうなの。探偵さん、雇われ？

探偵さん まあ、バイトなんで。

古田 アルバイト？

探偵さん はい。

古田 ああ、そう。探偵のアルバイトってあるの。

探偵さん あるんですね。

古田 じゃあ、気が向いたら、その事務所とやらに伺わせていただきますよ。

探偵さん お待ちしています。

古田は上手に去ろうとする。
ふと、立ち止まり。

古田 探偵さん。

探偵さん はい？

古田 小森って知ってます？ あの、いつもゲームばかりしてる女。

探偵さん ええ、まあ。

古田 あのオタクくさい女をね、買うんですよ。
探偵さん 買う？

古田 ええ、月に1回。決まって月末の水曜日に。

探偵さん なんの話ですか？

古田 セックスの話ですよ。でね、今日はその月末の水曜日。だから、6000円持って部屋まで行ったんですけどね。いないんですよ、最近ずっと。ああ、1回6000円なんですけどね。どう思います？

探偵さん たまたま用事があったんじゃないですか？

古田 そうじゃなくて、6000円。安いですかね？

探偵さん どうですかね。

古田 探偵さんなら、いくら払います？

探偵さん そういうのは、ちよっと。

古田 ちよっと、なんです？

探偵さん 考えたくありませんね。

古田 あの女、きつと他に男ができたんですよ。

探偵さん そうなんですか？

古田 そいつはいくら払ってるんだらうかって、それだけが気になるって。

探偵さん そんなこと、わたしに聞かれても。

古田 で、探偵さんなら、いくら払います？

探偵さん そもそも、他に男がいたとして、その人がお金を払っているとは限らないじゃないですか。

古田 じゃあ、なにを払うんです？

探偵さん 払うとか、払わないとか、そういうお金の問題ではなくて。

古田 お金も払わずに、誰があんなオタク女を抱きますか？

探偵さん それって、なんか矛盾してませんか？

古田 矛盾？

探偵さん だって、小森さんがどうかではないですけど、魅力的

な女性がいて、その人とそういうことがしたいから、お金を払うんですよ？

古田 探偵さんは女を買ったことがないんですね。

探偵さん ありませんけど。

古田 なら一度買ってみるとうい。

探偵さん わたしはいいですよ。

古田 買って見たらわかりますよ。セックスがしたいだけなら、他に良い女がいくらでもいる。そうじゃなくて、お金を払って買うというのが、大事なんです。

探偵さん わかりませんね。

古田 今度、女を紹介しますよ。

探偵さん 結構です。

古田 どうせ買うなら、みずぼらしい女がいい。

探偵さん だから、

古田 それじゃあ、また。

古田は上手に去る。

探偵さん せっかく、悲しくない方法を聞いたのになあ。

暗闇。

3 過去

下手から真理が現れる。

お腹はかなり大きくなっている。

その後ろから、ミラクルな赤ちゃんが買い物袋を持って付いてくる。

マジカルな赤ちゃんとほぼ同じ格好だが、こちらは青を基調とした衣裳になっている。

真理 ごめんなさいね。重たいでしょう？

ミラクル 全然、大丈夫ですよ。

真理 いつもありがとうね。

真理はベンチに座る。

お腹がかなり重たいようで、ベンチに座るのも一苦勞の様子。

ミラクル こちらこそ、いつもすみません。

ミラクルは買い物袋からポッキーを取りだす。

真理 いいのよ、それくらい。いつもそんな安いお菓子でいいの？

ミラクル これがいいんです。

真理 好きだよね。

ミラクル 私の世界にはなかったから、チョコレート。こんなにおいしいものがあるんだって、びっくりしました。

真理 もう1人の、マジカルなっちゃんの様子は？

ミラクル あの子は、まだふさぎこんでます。小森さんの部屋で、ずっとツムツムやっています。ハートがなくなったら寝て、起きたらまたツムツムやっています。

真理 引きこもりの代表みたいな生活ね。

ミラクル 私たちはこっちの世界の人たちみたいに、ごはん食べたり、寝たりする必要はないんですけどね。

真理 そうだ。もっと聞かせてよ、そっちの世界の話。

ミラクル どこまで話しましたっけ？

真理 オープニング曲の踊りを、実は毎回やらされて大変っていう話は聞いたから、マジカルなっちゃんとミラクルなっちゃんの2人が、なんとかっていう悪の組織と戦ってるってところからかな。ミラクル なつこ、あ、なつこっていうのはマジカルなっちゃんの

本名なんですけど、あ、ちなみに私は、なつみって言います。

真理 なつみちゃん。

ミラクル なっちゃんでもいいですよ。

真理 それだとややこしくない？

ミラクル ああ、そっか。じゃあ、お任せします。

真理 うん。それで？

ミラクル それで、そのなつこと私が戦っている悪の組織が、ゾロアスターっていうんですけど、ゾロアスターはリビドーを使って世界征服を企んでいるんですね。

真理 リビドー？

ミラクル リビドーっていうのは、まあ、性欲のことなんですけど。

真理 性欲？

ミラクル ゾロアスターってのはもともと大学の合コンサークルなんですけど、そのサークルが全然モテなくて、モテないままおっさんになって、そのおっさんたちの持て余した性欲がリビドーって力になって世界を支配し始めたんです。

真理 え？ うん。ちょっと待って、大学のサークルが悪の組織なの？

ミラクル もともとが大学のサークルだっていうだけで、今は立派な悪の組織ですよ。株式会社ですし。

真理 株式会社なの？

ミラクル それで、その株式会社ゾロアスターが世の女性たちをリビドーの力でヘタイラ化していったんです。

真理 ヘタ……なに？

ミラクル ヘタイラ、ま、メス奴隷です。

真理 メス……

ミラクル それでそのヘタイラ、あ、メス奴隷が、

真理 ヘタイラでいいわ。
ミラクル ヘタイラがどんどん増えていって、世界からは美女が消えてしまったんです。で、ブサイクと男だけの世界になってしま

い、子どもの出生率は激減、空前の少子高齢化社会となりました。
真理 でも、なんでなっちゃんたちが戦っているの？ 他の人たちは
そのゾロアスターと戦おうとしないの？

ミラクル 最初は自分の妻や恋人を奪われた男の人たちが、怒りを
武器に戦おうとしました。けれど、ゾロアスターに戦いを挑んだ
男の人たちは、みんなリビドーの前に敗れて、ゾロアスターの味
方になってしまっんです。

真理 そんなにすごいんだ、そのリビドーって。

ミラクル 所詮、性欲には勝てないんです。

真理 ああ。

ミラクル 結局、世界は性欲でまわっているんです。

真理 それにしても、なっちゃん2人だけで戦うのは無理があるん
じゃない？

ミラクル 男の人たちが無力になってしまった後、颯爽と現れたの
がゲイの人たちでした。

真理 ゲイ？

ミラクル はい。ゲイの人たちは男の身体を持ちながら、女性には
興味がない。つまり、ゾロアスターのリビドーに打ち勝つ、希望
の光となったんです。ゲイの人たちはゲイブレードという、ゲイ
にしか扱えない特殊な武器を使って、ゾロアスターに戦いを挑み
ました。その人たちがゲイブレードと呼ばれます。

真理 うん。もう覚えきれない。

ミラクル ゲイブレードの活躍で、一度は世界に平和が戻りそう
になりました。しかし、そんなゲイブレードの中に反乱分子が
生まれ始めたんです。それがネオ・ゲイブレードです。ゲイブ
レードの多くは、身体は男ですが、心は女性です。その女性の
心が、叫び出したんです。なぜ、自分たちはゾロアスターに狙わ
れないのかと。そこから、ひとつの恐ろしい考えが生まれました。
美女のいないこの世界こそ、ゲイブレードにとつての楽園では
ないかと。そして、ゲイブレードの暗黒面に次々と落ちていき

ました。

真理 ゲイブレードの暗黒面。

ミラクル 暗黒面に堕ちたネオ・ゲイブレードは、闇の力を利用
してどんどん勢力を伸ばしていきましました。それはまさに、ゾロア
スターと世界を二分するほどに。そんなある日、私となつてに特
殊な力が目覚めたんです。

真理 それはどうして？

ミラクル 怒りです。

真理 怒り。

ミラクル 私もなつこも、どちらもゾロアスターに友人や家族を奪
われました。

真理 なるほど。大切な人を想う気持ちが、新たな力を目覚めさせ
たのね。

ミラクル 違います。

真理 違うの？

ミラクル どうして私たちはゾロアスターに選ばれないのか？

真理 選ばれない方がいいんじゃないの？

ミラクル もちろんそうです。最初は私もなつこも、ゾロアスター
に怯えて暮らしていました。次々にまわりの女性が攫われていく
のですから。けれど、いつまでたつても私たちの前にゾロアスター
は現れません。え？ なんで？ 絶対に昨日攫われたあの子より、
私の方がかわいいじゃん。え？ おかしくない？ なに？ 私たち
のなにか悪いの？

真理 え？ 怒りつてそこ？

ミラクル そうです。私たちは、ゾロアスターから相手にされてい
ない。そのことに気付いた瞬間、怒りで特殊な力に目覚めました。

真理 その特殊な力つてのは、どういうものなの？

ミラクル 私たちはタナトスと呼んでいます。

真理 タナトス。

ミラクル 相手を強制的に賢者タイムへと導き、大勢の前で賢者タ

イムの自分をさらけ出すことで、もうほんとと死にたくなる状態にすることです。

真理 恐ろしい技ね。

ミラクル はい。しかし、今やリビドーに対抗できる力は、私たちのタナトスだけなのです。

真理 若いのに苦労してるのね。

ミラクル 私たちがこうしている間にも、向こうの世界がどうなっているか、心配は心配なんですけどね。

真理 でも、戻る方法がわからないと、どうにもならないものね。

ミラクル はい。まあ、こつちの世界も大変みたいだし、詰めが肝心っていうか。

下手から幸子が現れる。

幸子 あ、真理さん。それと……

ミラクル ミラクルなっちゃんです。

幸子 ミラクルさんのほうね。

真理 幸子さん、どうかしました？

幸子 うちの旦那見なかった？

真理 古田さんですか？ 見てませんけど。

幸子 そう。おかしいわね。

真理 今の時間だったら、お仕事なんじゃないですか？

幸子 仕事には行っていない、というか、行けないはずなんですけど。

ミラクル え？ 病気なんかですか？

幸子 結婚してからあの人が病気にかけたところなんて見たことないわよ。

ミラクル じゃあ、怪我かなにか？

幸子 死んだのよ。

ミラクル え？

幸子 まあ、正確には殺したんですけど。

ミラクル え？ 殺した？ 誰が？

幸子 私が。

ミラクル 誰を？

幸子 だから旦那を。

ミラクル えっと……それはこつちの世界ではどういう意味で。

真理 こつちの世界でもそのままの意味ね。

幸子 風呂場でね。3日くらい前に。

ミラクル それって大変なんじゃ……

幸子 大変だったわよ。血とかあれ風呂場だったから良かったけど。

真理 あれ、なかなか取れませんかね。

ミラクル なんで真理さん、そんなに落ち着いてるんですか？

真理 え？ ああ、まあ、いつかやるんじゃないかと思ってたし。

幸子 あら、そんな感じだった。

真理 なんとなく。あ、なんかごめんなさい。よく考えたら失礼ですよね。

幸子 別に大丈夫よ。その通りだし。

真理 でも、なんで今さらって気もしますけど。

幸子 ー、きっかけはシャンプーかな。

ミラクル シャンプー？

幸子 シャンプーが切れたんですけど、あの人、詰め替えもせず、

身体を洗う石鹸で頭も洗ってたのよ。おかしくない？ おかしい

でしょ？

真理 おかしいですね。

ミラクル そんな理由で……

真理 なっちゃん。

ミラクル え？

真理 人様の家庭に口をだすのは、よくないわ。

ミラクル いや、でも……

真理 古田さん、もし見かけたら、幸子さんが探してたって伝えと

きますね。

幸子 お願いでできるかしら？ あんな姿で、外をウロウロされたら恥ずかしいし。

真理 もしかしたら、もう帰ってきてるかもしれないから、幸子さんはお家で待ってた方がいいんじゃない？

幸子 そうね。そうするわ。

幸子は下手に去る。

ミラクル 警察。警察に言った方がいいんじゃない？

真理 いいのよ、別に。

ミラクル でも……

真理 どうせ、もうすぐみんな死んじゃうんだし。

ミラクル まだ死ぬって決まったわけじゃ……

真理 決まってる。だってあの月。もうあんな大きくなって。

ミラクル (月を見上げて) あれは、もうどうにもならないんですか？

真理 私にできることはなにもないから。

ミラクル だって、幸子さんが旦那さんを殺したのが本当なら、死体が勝手に動いてるってことですよ？

真理 みんな狂ってるのよ。きつとあの月のせいね。

ミラクル そんなの、月からしたら迷惑な話ですよ。

真理 そうね。でも、お願いだから、私のかわいいこの子だけは、どうか狂わせないでほしい。

真理はお腹をさすり、そのままうずくまる。

ミラクル 真理さん？

真理は声にならない声で呻いている。

ミラクル 真理さん？ 真理さん、大丈夫ですか？ ちよつと、え？ お腹痛いんですか？ 真理さん？ 真理さん？ え？ 嘘、なにこれ、血？ え、ちよつと、嘘、真理さん？ 真理さん？

暗闇。

4 現在

小森と探偵さんがベンチに座っている。

探偵さんは食べかけのアンパンと牛乳を持っている。

会話の合間に、少しずつそれらを食べ進める。

小森は相変わらず、ゲームをしている。

2人の向かいには幸子がいる。

奥では老婆がゴミを漁っている。

幸子 じゃあ、もう1回いくわよ。

探偵さん はい。お願いします。

幸子は大きく息を吸うと、そのまま息を止める。

幸子の姿は探偵さんから見えなくなる。

探偵さん おお！ すごい！ 本当に消えた！ え？ 幸子さん？ 幸子さんいるんですよね？ って、息止めてるから喋れないか。

探偵さんは手探りで幸子を探すが、その方向は見当違いである。

幸子が息を吐く。姿が見えるようになる。

幸子 消えてた？

探偵さん 消えてました。消えてましたよ。いやー、何回見てもす

ごいなあ。

幸子 ありがと。探偵さんくらいだから、そんなに驚いてくれるの。
探偵さん いや、すごいですよ。

幸子 でもさ、実際は使い道がなくて。

探偵さん そうですか？ だって、透明人間ですよ？

幸子 そうだけど。

探偵さん なんだって出来そうですけど。

幸子 でも、息を止めている間だけよ？ そんなの、せいぜい1分くら

らいが限界なわけで。なにができる？ たった1分で。

探偵さん えー、例えば……うーん、女の子のスカートをのぞいた

り？

小森 (探偵さんを睨み) あ？

探偵さん いや、例えば、例えばね、あとは……ほら、こう、スパ

イ的な？ どっかに潜入したり。

幸子 どこに？

探偵さん えー……なんかアメリカの……なんか秘密のいっぱいあ

る、ペンタゴンのな……

幸子 1分で潜入できる？ しかも、動きながらだと、息を止められ

る時間、もつと短くなるよ？

探偵さん そんな責められても……

幸子 ま、実際はなんの役にも立たないのよ。

探偵さん そうかもしれないけど。

幸子 月の影響だかなんだか知らないけど、こんな力になんの意味

があるんだか。

探偵さん 意味なんかないのかもしれないね。例えば、足が速く

てなんの意味があるのか。歌がうまくてなんの意味があるのか。

おっぱいが大きくて、なんの意味があるのか。

幸子 お金もうけができるじゃない。

探偵さん それはたまたま、スポーツ選手や歌手がお金になるって

だけで、生きる上では特に意味なんてないですよ？ 足が遅く

たって、音痴だって、貧乳だって生きていけるわけだし。実際、

幸子さんだって生きてるし。

幸子 殺すぞ。

探偵さん ごめんなさい。

幸子 そんなこと言いだしたら、全部意味なんてないじゃない。

探偵さん だから、そう言ってるんですよ。

幸子 だとしても、もう少し生活に役立つ能力だったら良かったの

に。

探偵さん 小森さんもなにかそういう能力があるの？

幸子 あるじゃない。

探偵さん なんです？

幸子 男をたぶらかす能力。

探偵さん わーお。

幸子 なに？

探偵さん いや……随分とダイレクトアタックだなんて……

幸子 なにが？ だって事実でしょ。

小森 たぶらかしてなんかない。あっちが勝手に。

幸子 そういうのをたぶらかすっていうのよ。

小森 たぶらかしてない。

幸子 自覚がないから、余計にタチが悪いのよ。

探偵さん ストップ！ ストップ！

幸子 なによ。

探偵さん やめましょう、そういう昼ドラ的な展開は。

幸子 昼ドラ？

探偵さん いや、だからね、こういう男女の愛憎的な……

幸子 愛憎なんてないわよ。

探偵さん ない？

幸子 愛もなければ憎しみもない。(小森に) ねえ？

小森 うん。

探偵さん え？ そうなの？

幸子 むしろ、この子が相手してくれてたおかげで、変に夜の相手

する必要がなくなって、助かってたくらいだし。

小森 どういたしまして。

幸子 よくあれとそういうことが出来るなあって感心するけど。

小森 別に、私は寝てるだけだし。

幸子 だって、なんか触られるだけで気持ち悪くない？

小森 幸子さんは夫婦だから、いろんな気持ちがあるから、そう思うの。気持ちが悪ければ感情もないし、別に平気。

幸子 あー、なるほどね。それは確かにあるかも。

小森 死んでからは、さすがに無理だけど。

幸子 あの人、死んでからもあなたのところに行ってるの？

小森 月末の水曜日には、毎回。

幸子 死んでまで人に迷惑かけないでほしいわ。

小森 だから、その日は家にいないようにしてる。

幸子 ごめんなさいね。私からも言ってみるけど、たぶん聞かないから。

探偵さん なに？ 2人はそういう感じなんですか？

幸子 なにが？

探偵さん なんとというか、普通というか、むしろフレンドリー的な。

幸子 別にフレンドリーではないけど。

探偵さん 先に言ってくださいよ。こっちはものすごく気を遣ってたんですから。もう、なんか妻と愛人の修羅場の間に立たされた

と思っ、探偵業で培ったあらゆるコミュニケーションの技を駆使して、この場をなごましてたんですから。

幸子 別になごんでないけど。

小森 愛人じゃない。愛なんてない。私が愛しているのは……

小森は探偵さんを見つめる。

探偵さん え？ なに？

小森 (目を逸らして) なんでもない。

探偵さん え？ なに？ 気になる気になる。

小森 なんでもない。

探偵さん つか、小森さん、好きな人いるの？ え？ 誰？ 誰？ 知ってる人？

小森 知らない！

探偵さん えー、なんで急に怒りだすの。

小森 探偵さんがしつこいからでしょ。

探偵さん しつこいって、だって、気になるんだから、しょうがないでしょ。

小森 気になる？

探偵さん いや、気になるっていうのは、別にそういう意味じゃないよ……

小森 じゃあ、どういう意味？

探偵さん それは……

幸子 やめろ！

探偵さん・小森 え？

幸子 そういうラブコメ的な展開やめろ！

小森 別にラブコメじゃないし。

探偵さん そうですよ。コメディなんかじゃないですよ。

小森 え、それって……

探偵さん あ、いや、だからふざけているわけではなくて……

小森 真面目なこと？

探偵さん え？ そりゃあ、まあ……

幸子 だからやめろ！

探偵さん すみません。

幸子 あんたは？

探偵さん はい？

幸子 あんたはそういう能力ないの？

探偵さん わたしですか？ あるにはありますけど、わたしのも特に役に立たない能力ですよ。

幸子 なになに？

探偵さん わたしは……アンパンと牛乳を食べている間だけ、死者と会話ができます。

幸子 なにそれ？

小森 死者？

探偵さん ええ。

幸子 それって幽霊的なこと？

探偵さん いや、幽霊というか、もう少し具体的なんですけどね。

なんとというか、ほんと、普通に会話するのな。

幸子 なにそれ、怖い。

探偵さん 怖くはないですよ。ほんと、普通なんです。なんか血みどろ、とかじゃないですし。

下手から真理が現れる。

白い布に包まれた赤子を抱えている。

布からはミイラのように黒く乾いた腕だけが見えている。

真理 こんにちは。

幸子 真理さん、もう身体はいいの？

真理 まだ万全じゃないけど。いつまでも引きこもってるわけにもいかないし。

探偵さん 真理さん、こんにちは。

探偵さんの声に反応して、老婆が振り返る。

真理 こんにちは。今日もお仕事ですか？

探偵さん 今は昼休み中です。

老婆は探偵さんに近づく。

真理 ご苦労さま。

探偵さん 出歩いて大丈夫なんですか？

真理 ええ、この子に外の空気を吸わせてあげたいし。

老婆（探偵さんに）いるのかい？

探偵さん ええ。

幸子 でも、まだ買い物とかはきついでしょ？ 必要なものがあつたら言つてね。旦那に車ださせてもいいんだし。

真理 古田さんこそ、大丈夫なんですか？

幸子 よくわかんないけど。死んでからはお腹も減らないし、眠くもならないみたいで、一日中その辺フラフラしてるわ。

真理 大丈夫なんですか、それ。

幸子 大丈夫なんじゃない？ あの人、自分が死んでることに気付いてないみたいだし。

真理 そうなんですか？

幸子 説明するのも面倒なんで、そのままにしてるけど。まったく、死んでるのに動くんて、ほんと迷惑な話よね。

探偵さん それも能力のひとつなんですかね？

幸子 そうなんじゃないの？

真理 変わった能力ですよ。

幸子 とにかく、必要なものがあつたら、遠慮なく言つてね。

真理 それなんですけど、大丈夫みたいです。

幸子 そうなの？

真理 はい。なんとというか、必要なものは、全部この子がだしてくれるので。

幸子 どういうこと？

真理 私もよくわからないんですけど、なんか足りないものがあるのと、いつの間にかそれがあつて。たぶん、この子なんだと思うんです。

幸子 なにそれ、すごく便利。

小森 なんでも？

真理 なんでも。この前は冷蔵庫の調子が悪くて、どうしようかな
ーって思ってたら、いつの間にか最新の冷蔵庫が置いてあって、
びっくりした。

幸子 えー、私もそういうのが良かった。

真理 たまたまかもしれないけど。

幸子 たまたま最新の冷蔵庫が置いてないでしょ。

真理 そうなんですけどね。

小森 私も赤ちゃん見たい。

真理 どうぞ。

幸子 あ、私も抱っこしてみたい。

真理 まだ首が座ってないから。

幸子 ああ、そっか。

真理 ごめんなさい。首が座ってきたら、ぜひ。

幸子 いいのいいの。

小森と幸子は真理を囲んで赤子を見る。

探偵さんがアンパンと牛乳を食べ終える。

探偵さん (手を合わせて) ごちそうさまでした。

真理 じゃあ、探偵さん、私たちはこれで。

探偵さん はい。では、また。

真理と幸子、そして小森は下手に去る。

老婆 行ったのかい？

探偵さん はい。

老婆 なにを話してた？

探偵さん 真理さんですか？

老婆 ああ。

探偵さん 気になるんですか？

老婆 イジワルするんじゃないよ。

探偵さん イジワルなんて、別に。

老婆 もうアンパンと牛乳をだしてやらないよ。

探偵さん それは困る。

老婆 さっさと話しな。

探偵さん 赤ちゃんのこと、大切そうに抱えていましたよ。

老婆 そうかい。

探偵さん 幸子さんが抱きたいって言ったら、まだ首が座ってない

からダメだつて。

老婆 過保護だね。

探偵さん あの赤ちゃんが、いずれ新世界の神と呼ばれるなんて、

想像つきませんね。

老婆 神なんかじゃない。悪魔だよ。

探偵さん 悪魔？

老婆 最初は神だなんだともてはやしても、騒ぎが落ち着けば、今

度はその力が怖くなる。欲しくなる。妬ましくなる。

探偵さん そうかもしれせんね。

老婆 過ぎた力は身を滅ぼす。

探偵さん いろいろあったんですね。

老婆 あつたさ。あの日から30年だよ。

探偵さん あの日、世界が終わった日。

老婆 もう30年。

探偵さん あなたが新しい世界をつくり出した日。

下手からマジクルなっちゃんが現れる。

マジクルなっちゃんとミラクルなっちゃん、2人の特徴を兼ね

備えた、新しい魔法少女。

探偵さん え？なに？誰？

マジクル マジクルなっちゃんです。

探偵さん マジクル……なに？

マジクル マジカルなっちゃんであり、ミラクルなっちゃんでもある。それがマジカルなっちゃんです。

探偵さん いや、全然わかんない。

老婆 まさか、幻の48話？

探偵さん まぼろし？

老婆 設定のみ残されており、決して放送されることはなかった、幻の48話だよ。

マジクル そうです。

探偵さん 知ってるんですか？

老婆 私が幼いころ、小森さんがよく話して聞かせてくれたよ。

マジクル 小森さん。懐かしいですね。

老婆 あなたは変わらない。

マジクル 私は歳をとりませんから。

探偵さん ちょっと、最初から説明して。

マジクル 私がこっちの世界にきたことで、完結することのなかった幻のアニメ「魔法少女マジクル☆なっちゃん」。その最終回2話

手前、第48話でマジカルなっちゃんことなっちゃんは、ゾロアス

ターの攻撃の前に瀕死のダメージを負います。

老婆 ミラクルなっちゃんが駆け付けたときには、すでにマジカルなっちゃんは虫の息。しかし、ミラクルなっちゃんだけでは、ゾ

ロアスターのリビドーに打ち勝つことができず、もはやここまでかと思われた、そのとき……

マジクル ミラクルなっちゃんの奇跡の力が、最後の奇跡を起こす。

それは、ミラクルなっちゃんの魂を分け与え、マジカルなっちゃんを生き返らせること。ミラクルなっちゃんの魂を受け取ったマジカルなっちゃんは、ミラクルなっちゃんのひとつになり、マジ

クルなっちゃんとして復活するのであった。

探偵さん それが……

マジクル 私です。ただ、私たちは47話のあとにこっちの世界に

呼ばれたので、結局、その48話は幻の回となり、一部のファンの間だけで、噂話として語り継がれることとなりました。

探偵さん それがなんでひとつに？

マジクル あの動く死体。

探偵さん 古田さん？

マジクル あいつが、私たちの住んでいる小森さんの家に押し入ってきて、なつこを襲ったんです。

探偵さん あの人ならやりかねない。

マジクル それで、ゾロアスターが襲ってきたと思ったなつこは必死に戦ったんですが、相手は不死の怪物。最後には力尽きてしま

い、そこにバイトから帰ってきたミラクルなっちゃんが登場ということで。

探偵さん 幻の48話が再現されたのか。

マジクル はい。

探偵さん 古田さんは？

マジクル 私のタナトスで倒しました。

探偵さん タナトス？ なに、古田さん死んだの？ いや、もう死んでるのか。

マジクル なので、リビドーだけを打ち破ったら、なんか変な感じになりました。

下手から古田が現れる。

古田 いやあ、皆さん、お揃いで。

探偵さん 古田さん。

古田 探偵さん、お仕事ですか？ いやあ、精がますますな。

探偵さん 今はお昼休みですけど。

古田 お昼休み！ 素晴らしい！ やはり人間、適度な労働と十分な休息が必要です。労働だけではダメ、もちろん休息だけではもつとダメ。その2つがバランスよく成立しているところに、真の人間

性というものが宿ります。人間とは個人でありながら、やはり社会的な生き物なんですな！ あっはっはっはっはっ！

探偵さん あの、セックスの話しかしなかった古田さんが……

古田 セックス？

探偵さん いや、どうぞ、続けてください。

古田 いやあ、なぜかはわからないのですが、わたしはね、ずっと腹は減らない、眠くもならない。これはこれで困ったもんでしてね。それが、さつき（マジクルを指し）そのお嬢さんに、なにやらガツンとやられてからというものの、妙に頭がスッキリしましってね、気分も爽快、心も晴れ晴れですよ。ずっと身体の中で蠢いていた、悪い虫がすっかり、すっかりどっかに行っちゃまったような気分ですね。いやあ、実に爽快。空気がうまい！ あっはっはっはっはっはっ！

マジクル 気持ち悪いでしょ？

老婆 気持ち悪いね。

古田 皆さん、わたしはね、働きますよ。きっと働きます。世の中の、社会の役に立つために、働きますよ。

探偵さん それは良いことですね。

古田 妻にもね、幸子にもこれまで迷惑をかけてきましたから、これからはあいつのことも、もつときちんと見てやろうと思うんです。子どもを作ってもいい。2人の子どもです。きっとわたしに似た、かわいい子どもが生まれますよ。あっはっはっはっはっはっ！

探偵さん それも良いことですね。

古田 とところで、幸子のやつ、どこに行ったか知りませんか？ さっきから探してるんですけどね。

探偵さん わたしは見かけていませんね。

古田 そうですか。どれ、あっちの方も探してみますか。それでは、皆さんもお元気で。

古田は上手に去る。

マジクル いいんですか？ 本当のことを教えてあげなくて。

探偵さん なにをです？

マジクル だって、幸子さんは30年前のあの日に……

探偵さん いいんですよ、古田さんには時間がある。永遠の時間がある。その永遠の時間の中で、いつかは幸子さんにも出会うかもしれない。

マジクル どうやって？

探偵さん 死んでも動く人がいるんです。死んでも生き返る人がいてもおかしくない。

マジクル もう月はないんですよ？ 新しい能力は生まれません。

探偵さん その能力だって、本当にあの月が影響していたのか、本当のところはわからないじゃないですか。30年前のあの日、どうして月が地球に衝突したのか、それすら誰にもわからないんだから。

老婆 寂しかったんだよ。

探偵さん 寂しい？

老婆 ずっと遠くでひとりぼっち。それじゃあ、あまりに寂しかったんだよ。

暗闇。

5 過去

下手から真理が現れる。ゆっくりと上手まで歩いてきたところで、ベンチに座る。しばらくぼんやりと空を眺めている。その表情に、最初のような硬さはない。

下手から幸子が現れる。手には少量の荷物。ベンチに座っている真理を見つけて、話しかける。

幸子 こんにちは。

真理 幸子さん。配給ですか？

幸子 ええ。真理さんは行かなかったの？

真理 うちはあの子と2人なんで、前回の分も余ってるくらいで。

幸子 必要なものはなんでもだせるしね。

真理 あれは、やめさせてます。

幸子 そうなの？

真理 こんなときだから、誰かに知られたら、危ない目にあうかもしれないし。

幸子 そうね。(空を見上げて) あれが衝突するってわかってから、ひどい騒ぎだったものね。

真理 だいぶ落ち着きましたけどね。

幸子 暴れたり、泣き喚いても、なにも変わらないってことがわかったのよ。

真理 そうですね。

幸子 とはいえ、まだどこにどんな奴がいるかわからないんだから、

1人でこんなところにいたら危険よ。

真理 あの子を小森ちゃんのところに入れていったところで。

幸子 お母さんはちよつと一休み？

真理 ええ。すっかり小森ちゃんとなつちゃんたちになついちゃって。助かってますけど。

幸子 今、5歳だっけ？

真理 はい。小森ちゃんが「魔法少女☆マジクルなつちゃん」の映像ばかり見せるから、すっかりはまってますよ。

幸子 なんだって、本人がそばにいるわけだしね。

真理 オープニングの踊りとか、教えてもらってるみたいで。

下手から、大きな荷物を持った、若い夫婦が現れる。

その姿は、探偵さんと小森によく似ている。

幸子 あら、こんにちは。

女 あ、古田さん。こんにちは。

幸子 なに、すごい荷物じゃない。

女 ええ、ちよつと……

幸子 どこかおでかけ？

女 ええ、まあ……

男 (女に) 行こう。

女 うん。(幸子に) じゃあ、すみません。

夫婦は上手に去る。

真理 今のつて。

幸子 303号室の人。

真理 ああ。

幸子 知らない？

真理 初めて会いました。

幸子 私も挨拶くらいだけ。たぶん、関西のほうにできたつてい

う、地下シェルターに行くのね。

真理 え？それって……

幸子 たぶん、デマだろうけど。

真理 ですよ。

幸子 どのかの国が月を破壊するミサイルを完成させたとか、どのかの国が地下に一大帝国を築いているとか、いろんな国の偉い人がどこかの島に集まっていて、その島だけは被害を受けないとか、

死ぬほど出回ったデマのひとつよ。

真理 その死ぬほど出回ったデマで、たくさんの方が死んだじゃないですか。それなのに、今さら。

幸子 赤ちゃんができたみたいよ。

真理 え？

幸子 それで今さらになって、死ぬのが惜しくなったんでしょ。

真理 だからって、その本当か嘘かもわからない地下シェルターに？

幸子 車もないのにな。

真理 ガソリンがありませんからね。

幸子 どうやって行くんだろかね。歩いて？ 何日かかるやら。それで、やっぱりデマだったらどうするの？ また戻ってくる？ お腹に赤ちゃんがいるっていうのに。

真理 そうですよ。

幸子が突然、うずくまり、手で顔を覆う。

真理 幸子さん？

幸子 私だって、死にたくない。

沈黙。

幸子 (立ちあがり)うちの旦那、死なないでしょ？ いや、死んでるんだけど、死んでるのに動くでしょ？

真理 はい。

幸子 死んでるから、眠くもならないし、お腹も減らない。だから、時間の感覚がないのよね。というか、そもそも死者には時間の概念がないっていうか。死んでから5年？ それくらい経つけど、なんか、まるで昨日のことみたいっていうか。そもそも、本人は自分が死んでいることに気付いてないけど。

真理 まだ説明してないんですか？

幸子 さすがに説明したわよ。あなたは死んでるんだって。でも、何回言っても無駄。なんていうか、実感がありませんでしょうね。そりゃあ、あんなに普通に動いてたら、実感なんかないだろうけど。そもそも、死の実感ってなに？

真理 わかりませんが。死んだことないし。

幸子 それでね、考えたの。月が衝突したら、あの人はどうなるんだろうって。たぶん、人類が絶滅しても、あの人は変わらず、実感がなくまま、フラフラしてるんだらうなって。

真理 そうかもしれないね。

幸子 それってつまり、能力を使えば、生き残れる可能性があるってことよね。

真理 まあ、人によっては。

幸子 だったら、私も自分の能力を使って、なんとか生き残れないかって、考えたの。

真理 透明人間になつて？

幸子 透明人間って言うけど、実際はどうなんだろうって。こーう、衝突する瞬間に、透明になったら、大丈夫だったりするかもしれないじゃない。

真理 透明というより、存在自体が消えてる、みたいな？

幸子 そう、そんな感じ。それでね、息を止めたまま、思い切り壁にぶつかってみたの。

真理 壁に。

幸子 全力疾走で。

真理 全力疾走。

幸子 めちゃくちゃ痛かった。

沈黙。

幸子 鼻もげるかと思った。

真理は笑いだす。

真理 ごめんなさい。想像しちゃって。息を止めたまま、全力疾走で、壁にぶつかる、幸子さん。

幸子もつられて笑い出す。

幸子 ちよっと、やめてよね。

真理 ごめんなさい。

2人の笑いが治まると、短い沈黙。

真理 (立ちあがって) さてと、あの子がいないうちに、洗濯とか
しちゃわないと。

幸子 お母さんは大変ね。

真理 それじゃあ。

幸子 ええ。

真理は下手に去ろうとする。

幸子 真理さんは、怖くないの？

真理 (立ち止まって) 死ぬことですか？

幸子 それもだけど、それよりも、あの子のこと。

真理 (振り返って) どうしてですか？

幸子 だって、結局、父親はわからないままなんでしょう？

真理 わからないというか、いないんですよ。

幸子 どういうこと？

真理 だって、もう何年も、そういうことしてませんから。

幸子 まさか……

真理 幸子さんが透明人間になるように、古田さんが死んでも動けるように、小森ちゃんがなっちゃんたちを呼びだしたように、私はあの子を産んだんです。

幸子 怖くはなかったの？

真理 怖かったですよ。どんどん大きくなっていくお腹を見て。

幸子 墮ろすっていう選択肢もあったでしょう？

真理 私、この団地でずっと、母と2人暮らしたんです。けれど、母は6年前に病気で亡くなりました。その直後に、あの子を妊娠していることがわかって。

幸子 うん。

真理 寂しかったんだと思います。そして、なにより、怖かったんだと思います。ひとりぼっちになることが。

幸子 なんか、わかる気がする。

真理 幸子さんも？

幸子 うちの旦那ね。

真理 はい。

幸子 時間の感覚っていうか、概念がないから、一日中フラフラしてるんだけど、夜には必ず、うちに帰ってくるの。

真理 そうなんですか。

幸子 特になにをするわけでもないんだけど、寝っ転びながら、テレビ見て。今はテレビなんかやってないのに。なんだ、テレビの調子が悪いなって、いつも。

真理 テレビはやらなくなったのに、電気とかガスが止まらないのが不思議ですよ。こんなことになっても、どこかで誰かが、電気やガスを送ってくれてるんだって。

幸子 うちの旦那も同じ。こんなことになっても、死んでも、必ず帰ってくる。それが最初は本当に気持ち悪かった。

真理 そうでしょうね。

幸子 でも、いつからか、そんな旦那の帰りを待っている自分がいて。殺したいほど嫌いだっただのに。ってか、殺したんだけど。殺しといて、あれなんだけど。

真理 あれですわね。

幸子 ひとりぼっちは、誰だって怖いよ。

真理 月が落ちてくることよりも、ずっと。

幸子 今は、もう怖くない？

真理 ええ。だって、あんなにかわいいんですから。

下手から、ミラクルなっちゃんが現れる。

ミラクル あ、真理さん、こんなところに。

真理 どうしたの？

ミラクル オープニングの踊り、やっと全部覚えたから、お母さんに見せたいって。

真理 えー、これから洗濯しようと思ってたのに。

幸子 いいじゃないの、それくらい。

真理 じゃあ、幸子さんも一緒に行きましょうよ。

幸子 いいの？

ミラクル もちろん。って、私の家じゃないですけど。

幸子 じゃあ、お邪魔しようかしら。

真理 行きましょう。

幸子 ええ。

3人は下手に去る。

暗闇。

6 老婆（独白）

あの日、雪が降って、あたり一面が真っ白に染まっていくのを見て、ああ、終わるんだ、ここで終わるんだ、そう思いました。

それからのことはよく覚えていません。

目が覚めたときには、世界は真っ白で、驚くほど静かでした。

月は粉々に砕け散り、流星となって降り注いでおりました。

そのあまりの美しさに、声をあげる人はありません。

真っ白な世界で、わたしはひとりぼっち、その美しさに心を奪われ

ていたのです。

それから、わたしはまず、母と住んでいた団地をつくりました。

それはおそろしく簡単なことでした。

わたしは頭のなかでイメージしたものを、なんでも生み出すことができるのでした。

真っ白な世界に、ぼつりと団地が立ちました。

次に、団地の前にあった、猫の額ほどの公園をつくろうと思いましたが。

老朽化も甚だしいベンチ、片方の鎖が外れているブランコ、猫のトイレになっていない砂場。

永らく回収がきていないゴミの山も、記憶にある限り、忠実に再現しました。

それから少しずつ、世界を再現していきました。

わずかに生き残った人々のため、食べ物や衣服も生みだしました。

30年の月日が経ちました。

わたしは神と崇められ、やがて悪魔と蔑まれるようになりました。

わたしがつくりだした、そんな世界を見ていただくと思うのです。

そんな世界で、必死にわたしを守ろうとした母の声を、聞いていたかどうかと思うのです。

暗闇。

おわり